

第一章 バレエの歴史

「舞踊」(ダンス)の発祥はそれが後に豊猟や五穀豊穡を願う祭式や宗教や関連付けられたとしても、初原的には自然発生的なものだと考えられます。それはそうした人間存在に直接的に係る事象から離れ、「舞踊」(ダンス)が自ら踊って楽しむもの、若しくは観て楽しむものとしての地位を獲得して以降も、次から次へと新しいスタイルの「舞踊」(ダンス)が生起しているのを見れば明らかな事と思われまます。

その意味でバレエの発祥を厳密に時間軸上に特定する事は困難なのですが、語源的にはある程度解明され、今日の研究ではルネサンス期のイタリアで王侯貴族や富裕層の間に流行した宴席の余興としてバロ(Ballo)と呼ばれる極単純な動作のダンスがその原型だとされています。

この14~15世紀に於けるバレエの原型ダンスは舞踊というよりも演劇に近い物だったと考えられ、ダンサーも観客も宴会の出席者であり、衣裳はおよそ激しい運動をするのに適さない豪華で重々しい王侯貴族の平服のそれで、もちろん現在の回転やジャンプを多用する「バレエ」とは程遠いものでした。

近代バレエの成立は後段に譲ることとして、このバロなる代物はそもそもが宴会などの余興の踊りですから、その内にただ単純なステップを踏むだけでなく踊りに物語性を持たせたら面白かろうと考える者が現れたとしても不思議ではありません。ここで同じ王侯貴族や富裕層の娯楽としてのダンスに、所謂宮廷社交舞踊として存続するものと後にバレエと進化するダンスとの間に違いが生じるのですが、もっと大きな違いはこの「ストーリーのあるダンス」がフランスに渡ってから生じます。

ところでこの「ストーリーのあるダンス」ですが、物語はもっぱら神話や伝承、宗教説話、寓話などを題材にしていた様です。1496年にはレオナルド・ダ・ヴィンチが衣裳と装置を担当した「楽園」と名付けられたダンスが上演されたという記録が残っています。

神話の英雄や神々に扮したイタリアの王侯貴族達は今で言う「変身願望」の現われでしょうか、すっかりこの「ストーリーのあるダンス」— 15世紀中庸にはバレット(Balletto:単/Balletti:複)という名称で定着していた様です— が気に入り、頻繁にこの舞踏会を催したと伝わっており、このブームはイタリアのみならず、中部ヨーロッパから東ヨーロッパにも伝播して行きました。

そしてこの「バレッティ」が「バレエ」に変容するきっかけとなったのがイタリアの名家メディチ家の娘、カトリーヌ・ド・メディシスのフランス王室への嫁入りでした。(1533年)

バレッティ好きのカトリーヌによってフランスにもたらされたバレッティはフランス語風に「バ

レ」(Ballet:フランス語は末尾Tを発音しないので)と呼ばれ、フランス王室を中心に大流行を見せます。

特に 1643 年に即位したルイ 14 世は無類のバレエ好きとして知られ、自身がバレエ出演したのみならずバレエの中の、特に踊りの部分をよりテクニカルで見ごたえのあるものにしようと王立舞踊学校を 1661 年に開設、専門の舞踊手育成に乗り出しました。

たとえばルイ 14 世の舞踏教師ピエール・ボーシャンによって所謂立ち方の五つのポジションが定められたのもこの時ですが、それによってそれまでのバレエにもたらされた大きな変革は、それまでのバレエは王侯貴族など特権階級が自分で踊って楽しむものだったのですが、これ以降は訓練を受けた専門の舞踊手が踊るものを「観て」楽しむものへと変化した点です。その意味でルイ 14 世は最後の王様ダンサーという訳です。

そして「観て」楽しむ場所はそれまでの宮廷の広間では狭すぎて、オペラなどと共にバレエを上演するための専門の劇場がヨーロッパ各地に出来始めたのもこの頃です。パリには 1671 年にオペラ劇場が建てられました。(現在のガルニエ宮とは別物です) しかし一般庶民が劇場に出入り出来る様になったのはさらにもっと後のことです。

17 世紀後半、バレエに更に革新的な出来事が起ります。それは女性舞踊手の登場です。

それまでは宗教的道德上の理由から女性が無闇に人前に自分をさらす事、まして足を見せる事などは全くの禁忌とされていました。ですから女性の役は女性のお面を被った男性が演じていました。

しかし女性の登場は「観るもの」としてのバレエ人気を一気に高め、18 世紀に入るとマリー・カマルゴ、マリー・サレなど女性舞踊手が人気を集めます。中でもカマルゴは踝が見えるスカートと踵の無い靴でそれまでは男性のテクニックとされていた跳躍を踊りに取り入れ、現在のバレエ・テクニックの先駆を為しています。

一方、バレエの構成自体にも変化が訪れます。それまでのバレエは既存の神話や物語を舞踏的に映すだけで場合に寄ってはオペラの様子セリフや歌も挿入されていましたが 1760 年、ジャン＝ジョルジュ・ノヴェールが『舞踊とバレエについての手紙』を著わして、バレエはバレエの為専用にかかれた台本に沿って演じられる踊りと身振り(マイム)による舞台演劇であるべきであると主張し、それが以後のバレエの基本概念として定着して行きます。

更に 18 世紀後半になると社会情勢、すなわち王侯貴族層の凋落、宗教的タブーの無意味化など既得権に縋っていた勢力の社会支配力が低下し、所謂一般庶民・市民層の勢力が増大して行きます。

その象徴的出来事がフランス革命であり、ぜんまい仕掛けの時計にシンボライズされる理性や

合理主義が王権神授説に代表される守旧的宗教観にとって代わります。

しかし程なくしてその反動として感受性や主観を尊重して非合理的なもの、神秘的なものに傾倒する動きも主に文芸界で生まれ、今日「ロマン主義の時代」と呼ばれる時代が到来します。この時期、バレエも大きくその潮流に接近し、マリー・タリオーニ、カルロッタ・グリジ、ルシル・グラン、ファニー・チェリートによる「パ・ド・カトル」、「ラ・シルフィード」「ジゼル」といった今日「ロマンティック・バレエ」と呼ばれる一連の作品が誕生しています。

ロマンティック・バレエの成功にはポアント（トゥ・シューズ）の発明と所謂ロマンティック・チュチュが大きく関係しています。

通常の靴以上の回転とつま先立ちを可能ならしめる靴と軽い素材のスカートを手に入れた女性舞踊手達は、軽々と優雅に空気の様に舞い踊り、市民革命を経て庶民も入れる様になった劇場でセンセーションを巻き起こして行きます。

こうして最盛期を迎えたフランスのバレエですが、打ち続く欧州戦乱など様々な理由が要因して以後、長い低迷期を迎えてしまい（1890年、コッペリア初演に主演したジョゼッピーナ・ボッアッキは、プロイセン軍に包囲され食料の途絶したパリで餓死してしまったと伝えられています）バレエの主役はロシアへと移って行きます。

ロシアで最初に演じられたバレエは17世紀にフランスの興行師がツァーリの王宮に持ち込んだ「オルフェウスとエウリディケ」と言われていますが、18世紀の前半にはフランス人のジャン＝バティスト・ランデによりサンクトペテルブルクにバレエ学校が創立され、以後、ロシア・バレエはこの帝室バレエ学校と後に創建されるバレエ劇場を中心に発展して行きます。

ロシアではフランスのバレエ・テクニックをそのまま踏襲するのではなく様々な独自の技法が考案され、踊り自体がどんどん高度化し、かつ様式として確立して行きます（例えば有名な32回転や、アダージオ、男女ヴァリエーション、コードのパ・ド・ドゥ形式など）が、何をおいても重要なのは1847年のマリウス・プティパのフランスからの招聘でした。

フランス時代はこれといって目立った業績もなかったプティパですが、マリンスキー劇場総支配人イワン・フセウォロシスキーの先見の明と、何よりもピョートル・チャイコフスキー、アレクサンドル・グラズノフといった偉大な作曲家との出会いが彼をしてバレエ史上に燦然と輝く名振付家にならしめました。

この時代のロシア・バレエを含むバレエのスタイルを今日「ロマンティック・バレエ」に対して「クラシック・バレエ」と呼びますが、ロシア・バレエは19世紀以降も発展を続け、それはソ連時代を挟んでも衰える事無く、というかソ連時代には寧ろ国策として「クラシック・バレエ」団の海外

公演は奨励され、バレエ・イコール・ロシア（ソ連）という定説を、先輩フランスを凌駕して今日世界に抱かせるに到っています。

しかしロシアで見逃せないのはクラシック・バレエの開花のみならずバレエ史に不朽の名を刻むセルゲイ・ディアギレフによる「バレエ・リュス」と、そこに集ったアンナ・パヴロワ、ヴァツラフ・ニジンスキー、タマーラ・カルサヴィナ、ミハイル・フォーキンといった綺羅星の様なダンサー達と振付家を世に送り出した事でしょう。

このクラシック・バレエとは一線を画す、所謂モダン・バレエを演じる一座は主に西ヨーロッパ各国の文化人に衝撃を与え、特にイーゴリ・ストラヴィンスキーの音楽を用いた一連の作品では賛否両論の渦を巻き起こすなど、常に舞踊界の台風の目としてありました。

このほぼ同時期、舞踊界にはイサドラ・ダンカンなどに代表されるモダン・ダンスの潮流が興隆していました。彼女らの主張は舞踊とは人間の身体が自然体として生み出す動きであってしかるべきで、恣意的に肉体を使用すべきではない、たとえばポワントを用いた踊りなどは人間本来の動きとは程遠いと既存のバレエをある部分で否定するところを出発点としています。そして生み出された作品群は、逆に多くのクラシック・バレエの振付家達に衝撃を与えました。

20世紀、世界は二つの大戦に包まれ、バレエに限らずあらゆる文化芸術は疎外され、その発展を阻まれました。

そして戦後世界にあっては、広い意味での「表現の自由」の時代がほとんどの国に到来しました。舞踊界にあっては新たな身体表現・舞踊表現の開拓が模索される時代が到来した事を意味し、日々新しい創作活動が行われています。

モーリス・ベジャール、ローラン・プティ、ウィリアム・フォーサイス、イリ・キリアンといった20世紀の振付家の作品はもはや舞踊様式をカテゴライズして名付ける事を無意味化したと言えるでしょう。

その一方で伝統的なバレエ、主に18から19世紀に生み出された作品群は、未だに世界各国で上演され続け、その輝きを失わずに今日に受け継がれているのです。

第二章 我が国におけるバレエ

我が国のバレエの最初については諸説あるものの、はっきり残っているのは明治最晩年、すなわち大正元年(1912年)、前年にオープンしたばかりの帝国劇場の歌劇部に招聘されたイタリア人教師、ジョバンニ・ヴィットリオ・ローシーが歌劇部員にバレエを指導した、という記録です。

この帝国劇場開設の意味については本稿に関係ないので割愛するとして、当事のオペラにはバレエが挿入されるのが一般的でしたからローシーはバレエ教師として招聘された訳ではなく、あくまでもオペラの教師として招聘されていました。ローシー自身は自分はエンリコ・チェケッティの高弟だと自称していたそうですが、彼はほんの数年で日本を離れ、この人物については記録が乏しいのが現状です。

それは兎も角、ローシーにバレエを習った歌劇部員はその後バレエの道に進まず、モダン・ダンスの道に進んだ者が殆どで、ここで日本のバレエの足跡は一端途切れてしまいます。

次に我が国でバレエが注目を浴びたのはバレエ・リュスのプリマとして世界的名声を得ていたアンナ・パヴロワが自らのバレエ・カンパニーを率いて世界巡業中、大正11年(1922年)に我が国を訪れて全国8都市で公演を行った時でした。

この公演は我が国文化人に大きな衝撃を与えたと同時に、この西洋舞踊を習ってみたいとバレエに関心を持つ層を一気に増やしました。

ところがローシーが去った後、バレエを教えてくれる教師が日本にはいません。と思いきや、大正9年(1920年)、革命を逃れてひっそりと日本に入国していたロシア人貴族の娘姉妹が母国にいた頃、バレエを習っていました。このエリアナ(日本名霧島エリ子)とナデジタ・パブロワ姉妹は昭和2年(1927年)、鎌倉の七里ガ浜に我が国初の民間バレエ教室を開きました。この門下からは東勇作、橘秋子、貝谷八百子、近藤玲子、大滝愛子、島田廣、服部智恵子といった我が国バレエの黎明期を担った人々が輩出されました。

その後、昭和11年にはプロのバレエ団員としてロシアで踊っていたオリガ・サファイア(日本名清水みどり)が日本人外交官と結婚して来日して日劇ダンシングチームの教師に就任、その門下からは松山樹子、松尾明美、谷桃子といった戦後の我が国バレエ界を担った人材が輩出されました。

世界各国の例に漏れず我が国のバレエも二つの大戦で大きく停滞しますが、終戦の翌年、昭和21年(1946年)、満州のハルピンでバレエを学び、上海バレエ・リュスのソリストとして活躍していた小牧正英が帰国、蘆原英了等の呼びかけで我が国バレエ人が結集して結成された東京バレエ団(現東京バレエ団とは別)で「白鳥の湖」全幕を振付、自ら主役を踊ります。(舞台美術は藤田嗣治)この公演はバレエに飢えていた我が国観客を呼び込んで空前の大ヒットとなり異例のロング・ラン公演となります。

しかしこの東京バレエ団は時経ずして解散、それから我が国のバレエ界は様々な大小カンパニーの独立独歩・百花繚乱状態に陥ります。

そんな昭和32年(1957年)、ソ連からモスクワ・ボリショイ劇場バレエ団が来日、公演を行いま

した。

日本中のバレエ関係者に凄まじい衝撃が走りました。それは「自分達がバレエだと思ってやってきたものはバレエに似て非なるものだった」というショックだったと言っても過言ではありませんでした。そして個々がバラバラにバレエを追及しても本場に追いつくのは何世紀も先になってしまう、という危機感から団体の統合が行われ、日本バレエ協会もこの時期結成されました。

そして技術の研鑽を続けた結果、昭和 40 年代の後半から深川秀夫、森下洋子といった日本人ダンサーが先駆者として世界コンクールで海外ダンサーを凌駕して高い評価を得るに到り、今世紀に到っては世界の一流コンクールで我が国若手ダンサーの入賞の無い年は無い程に、その技術は向上してきているのです。